チャペルの窓

「桃の季節に想う」

匂いは不思議なもの、その匂いを嗅ぐと思いだすものがある。6 月、「桃の匂い」は我が家にとっては特別。桃の匂いは厳しくも、楽しかった小学生時代を想い出させる。

食べるためには何でもした戦後、私の両親はまさしく食べるため、私達、子供に食べさせるために、造船の技術者の父が開拓農家になるという一大決心をして、箱作へ引っ越してきた。笹山を開き、笹の根を取り、山土を掘り返えし、何を作っても十分できるものがない畑の中に、桃の木を植えた。

桃を植えた理由を聞きはしなかったが、「桃、栗三年、柿八年」と言われことから、早やく実の採れる桃を選んだに違いない。三月には花を咲かせ、やがて芽吹く枝になる小さな桃に、袋掛けをし、大きくなってゆく桃は厳しい開拓農家にとっては数少ない楽しみであり、新聞紙の袋の中で育ち、やがて、匂いを送り始める桃は厳しかった開拓時代の数少ない夢の実現だった。

今年も、桃の季節を迎え、小学生の頃の夢の味わい、懐かしみ、80代半ばを迎え、桃を味わえる「今」を心から感謝する。

「涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る。
種入れを抱え泣きながら出て行く者は束を抱え喜び叫びながら帰って来る。」（詩 126:5、6）